

第1話 「湖畔の村に秋がきた」

にくきゅうが少しつめたくなってきた。秋がやってきたんだ！

メチャくんは夏用のガーゼの洋服をぬいで、

秋用のコットンフランネルの洋服に着替えました。（デザインは同じだけね！）

息が白くなる冬には、寒がりのメチャくんは、毛糸のセータに着替えます。

（ながそでになるだけで、やっぱりデザインはいっしょなんです。）

パジャマも、ながそでのロンパースを出して…と。

洗面所の床のタイルもころもがえ。

くものアマンさんが縫ってくれたキルトのマットをしきました。

メチャくんは季節がかわるときが好きでした。

窓をあけて大きな声でいさつします。

「秋さんこんにちは、また会えてうれしいよ！

夏さんさようなら、また来年会うのを楽しみにしているよ！」



第2話「遠まわり」

よく晴れたあたらしい朝です。すっかり美しい銀縁になったミモザの木のしたで
メチャくんとコロちゃんがどんぐり茶をのんでいると、青い旅鳥がやってきました。

「こんにちは。」

「こんにちは、ずいぶん遠回りをしてしまったよ。」

メチャくんは、となりに ほつ と腰をおろした旅鳥に、
あついどんぐり茶をいれてあげました。

コクッとひとくち飲んで、旅鳥はふうっと息をはきました。

「でもね、遠回りしたからここにたどりつけたんだ。

今まで進んできた道はまちがってなかったんだね。」

「ようこそ、湖畔の村へ！」

メチャくんとコロちゃんと旅鳥は高くしずかな秋の空のしたで、
ポットのお茶がなくなるまで、ゆっくりと過ごしました。



フタバ
どんぐりの中を
くりぬいて 作った
マク"カップ"
底も平らに。

第3話 「自信のかけら」

メチャくんがお湯を沸かしていると、どろだらけの顔をしたコロちゃんが玄関の土間に立っていました。

メチャくんはちょうど沸いた熱いお湯にタオルをひたして固くしぼり、コロちゃんの顔をそっとふいてあげました。

こういう状態のコロちゃんはたいてい「自信」をどこかに落っことしてきているのです。メチャくんはふわふわの小さな毛布でコロちゃんをくるんで、いつものイスに座らせると、そよそよの森へ走っていきました。

そして森にあいさつして、落ちている栗を少し拾わせてもらうと、またせっせと走って帰り、まきストーブの上で しゅんしゅん 茹で、皮をていねいに剥いてください、ちいさなお皿にのせてコロちゃんにさし出しました。「さっき、そよそよの森に落っこしてたコロちゃんの「自信」のかけらを拾ってきたよ。さあ、あたたかいうちに食べて。」

コロちゃんはそつとつまんで「自信のかけら」を口にいれました。ほくほくとして、やさしい甘さがじんわり溶けて広がってゆきました。窓のむこうには、もうすっかり夜がやってきます。「だいじょうぶ。お月さまが眠るころ、ぴかぴかのまっさらな朝がやってくるよ。」

コロちゃんはどうしてこんなにも自信をなくしていたのでしょうか。

そのお話は長くなるのでまたいつか。



第4話「冬じたく」

つめたい風がぴゅうとふく季節になりました。

メチャくんは長袖のセーターに着替え、毛糸のくつしたをはきました。

そして、戸棚の奥からゆたんぽも出してきました。

夜、ベッドに入る前にゆたんぽの口からコポコポとお湯をそそぎ、

ラベンダーの油をほんの少しいれます。

ふわあつといい香りがして、いっぽ眠りに近づきます。

そして朝起きたときにまだふんわりと温かくいい香りのお湯を使って、

顔を洗ったり、おそうじしたりするのです。

ハーブが大好きなこぶたのミルトンに教えてもらいました。

ミルトンとアマンさんは毎年12月に開かれる

湖畔の村の「冬の日のおまつり」のとき、

アマンさんが縫った小さな袋の中に、

ミルトンが乾燥させたハーブをいれてサシェを作り、

みんなにプレゼントしてくれます。

「寒がりでよかったな。

寒がりだから、こうやって

ゆたんぽをだっこして

眠れる冬が好きなんだもの。」

そう言ってメチャくんは

ぎゅっとゆたんぽをだきしめました。



ミルトンとアマンさんの
手作りサシェ。
毎年ちがう袋に
その年にぴったりある
ハーブのブレンド。
*

Sachet

第5話「冬の日のおまつり～準備編～」

まるくて白い綿のような雪が降る頃、湖畔の村の「冬の日のおまつり」が、おひさまレストランで開催されます。

その日のために村の住人たちは、それぞれが、それぞれの出来ることでみんなに喜んでもらおうと、しゅくしゅくと準備を進めてゆきます。準備も楽しいおまつりの一部なのです。

湖畔の村の住人にとって「時間」は使うものでも、追いかけられるものでも、つぶすものでもない、目に見えない共に過ごす大切なともだちでした。

ミルトンとアマンさんはサシェ作りに夢中になり、ひまわりさんはたくさんの料理の下ごしらえに精を出し、

うりちゃんはお菓子作りをせっせと進めてゆきます。小さな仲間たち、飛ぶことの出来る仲間たちは、

おひさまレストランに集まって素敵に飾り付けをしてゆきます。

それから山野さんにマーチ、シュウタス、バディは山野さんの工房に集まって、

おまつりのときに演奏する曲をあわせています。

チコちゃんとしづくちゃんは楽しくダンスの練習をして、

ルーンはじっくりと新しい年の星を読み、それをウェインが記録してゆきます。

こうやって湖畔の村では、こつこつといねいに時間が厚みを増してゆくのです。

さて、メチャくんはというと、毎年冬のおまつりのときに新しい詩を朗読するので、

コロちゃんと朗読の練習をしていました。

朗読にも熱が入り始めたときです。

”トントン” とささやくような

ノックの音が聞こえました。

メチャくんとコロちゃんは顔を見あわせました。

いったい誰がやってきたのでしょうか？

続きは「第6話冬の日のおまつり

～開催編～」で。



第6話「冬の日のおまつり～開催編～」

ドアをあけると、そこには赤い洋服にゆたかな白いひげのおじいさんがニコニコして立っていました。

「メチャくん、こちらの・・・派手なおじいさんはどなた？」

コロちゃんがおずおずと聞きました。

「サンタクロースさんだよ。とつこつトンネルのむこうで、
”クリスマス”っていうおまつりがあってね、サンタさんは、
子どもたちにとって大切な役目があるんだ。」

「はじめまして、コロちゃん。子どもたちのところへ行く前に毎年メチャくんの
うちに寄って熱いミルクのお茶をよばれていくんだよ。入ってもいいかい？」

メチャくんは、いろいろなスパイスを煮詰めたお茶に熱々のミルクをいれて
サンタクロースに渡しました。

「身体があたたまるよ。」

サンタクロースは大切そうにミルクのお茶を飲み終えると、
「ありがとう、メチャくん。では、行ってきます。」そう言って、
ドアをあけて出て行きました。

「さあ、ぼくたちもおひさまレストランへいこう！」

おひさまレストランはいつも以上にキラキラして、そこに集まる村の住人たちも、
いきいきと楽しそうです。みんな思うままに踊ったり、おしゃべりしたり、食事をしたり。
そして”冬のおくりもの”という歌を、ほっぺがまっかになるくらい全力で歌います。

最後にメチャくんが詩を朗読し終わると、今度はみんなで後片付けも楽しめます。

片付け終わり、手作りサシェとクッキーを持って家路に向かう頃、みんなの胸の中には、
このひと冬が越せるほどの灯りがぬくぬくと灯っていました。

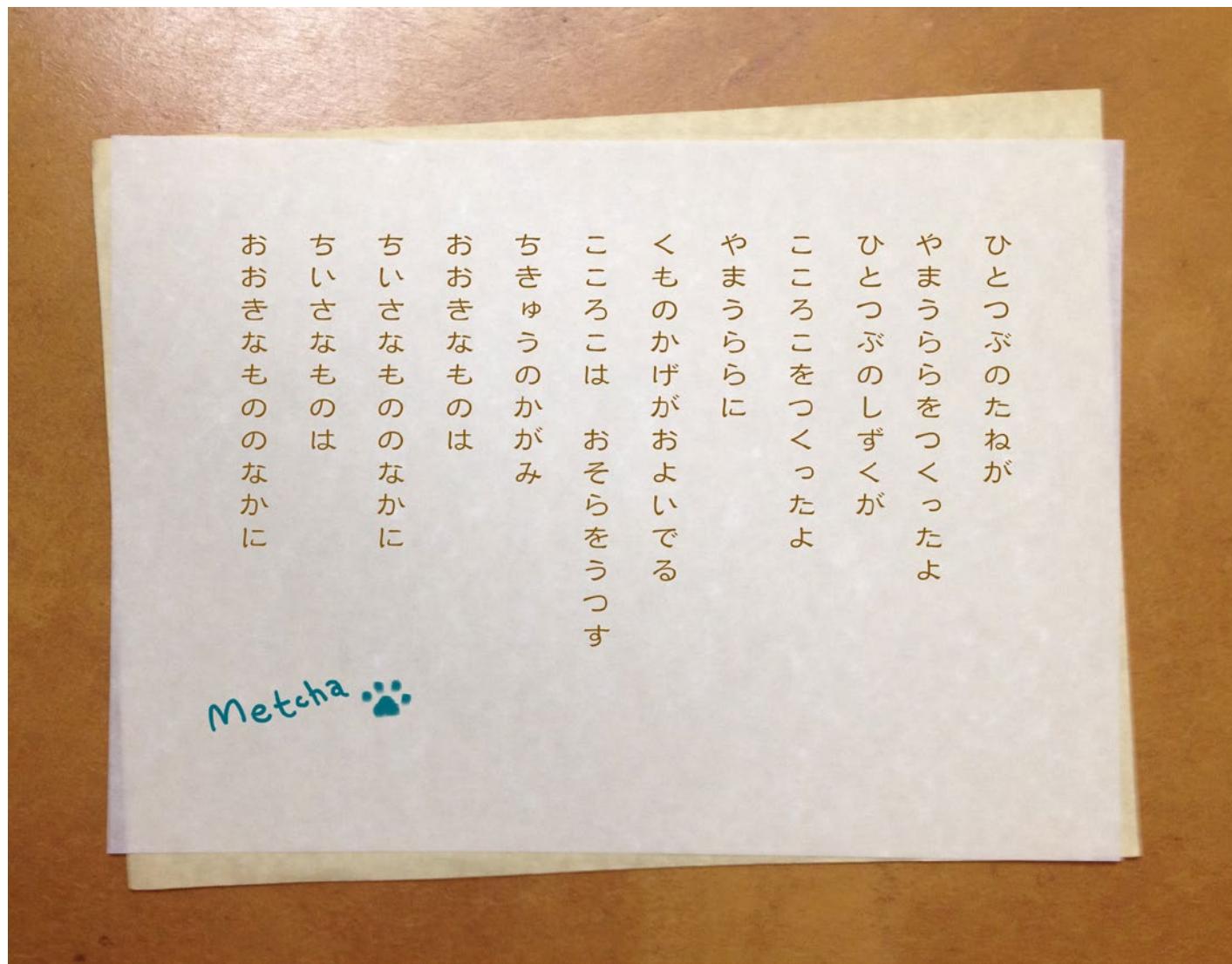
「いつもおまつりの後はちょっとさみしいね。」コロちゃんがつぶやきました。

「そうでもないよ、だってまた来年のおまつりを楽しみに待つことができるからね。」

そう言ってメチャくんは、ぽっかりまるいおつきさまが浮かぶ、空を見上げてほほえみました。



メチャくんが朗読した詩です。



第7話「手紙」

湖畔の村の住人が眠りにつく頃、
しんしんと雪が降りはじめました。
しんしん しんしん・・・

いつもより早起きをしたメチャくんが窓を開けると、
湖畔の村は雪に包まれてまっしろの世界です。
メチャくんは顔を洗うとすぐにオーバーを着て長靴を履き、
白い世界に飛び出しました。
そして、「今日」におはよう！と元気にあいさつすると、
まだ生まれたてほやほやの雪野原にそっと足をふみいれました。

きゅきゅきゅ きゅ

何歩も何歩もふみしめて大きなハートを描きました。

「メチャくん、なにしてるの？」

まだ寝ぼけた顔でコロちゃんがついてきました。

「お空にお手紙書いたんだよ。

いつもひろい青空や面白いかたちの雲や
きれいな虹を見せてくれてありがとうって。」

そのとき、どこからかひらひらと小さな花がおちてきて、
メチャくんの手の中におさまりました。

「もうお空からお返事きたね。」

メチャくんとコロちゃんは小さな花を大切に持って
朝ごはんを食べに家の中にはいってゆきました。



第8話「メチャくんのてぶくろ」

メチャくんのてぶくろは、もうずいぶん前に編まれたもので今のメチャくんには少し小さすぎました。

でも、寒くなるとときどき出してきて、にぎにぎしたり、ほおずりしてタンスにしまいます。

「そのてぶくろのこと大好きなんだね」ある日コロちゃんが言いました。

「このてぶくろとぼくは特別な間柄なんだ。うんと小さな頃からぼくの手をずっとあたためてくれたんだもの。

ぼくはこのてぶくろのことを思い出すだけで、胸があたたかくなるんだよ。」

そのときハリーが薬草を持ってやってきました。

「メチャくん、きみにこれを持ってきたよ。おふろにいれるとあたたまるよ。」

ハリーがぴりぴりに冷たくなった手でメチャくんに薬草をわたしてくれました。

「ありがとう、ハリー。ちょっとまって、これ、きみに。」

そう言ってメチャくんはあのてぶくろをハリーにさしだしました。

「すごくあったかいよ！」と、ハリーは何度もジャンプをして喜びました。

「メチャくん、きみの大切なてぶくろ、あげてよかったです？」

コロちゃんがちょっと心配そうに聞きます。

「もちろんさ！あのてぶくろが今度は

ハリーの小さな手をあたためてあげているんだと思うと、

ぼくの胸はもっとあたたかくなるよ。」

そう言ってメチャくんは両手で胸をおさえました。



第9話「メチャくんがかぜをひいた」

クシュン！コホコホ。。。

「鼻が乾いてる。ぼく、どうやらかぜをひいたみたいだ。」

メチャくんは蒔きストーブの前のソファにこしかけて、ひざかけをかぶりました。

コホコホ。。。コホコホ。。。そして、そのままウトウト睡ってしまいました。

ふるっと寒くなって目が覚めかけたとき、ふわっと優しくあたたかなものに包まれ、目を開けてみると、

いつのまにか屋根裏からストーブの前に移動しているバスケットベッドの中で、ふくふくの毛布にくるまっていました。

蒔きストーブの上にはしゅんしゅんとお湯が沸き、ぼんやりとみんなの姿が見えます。

「メチャくん、目、さめた？」

コロちゃんが心配そうにのぞき込みます。

「メチャくん、目をさましたんだね。」

ひまわりさんがあたたかいおかゆを持ってきてくれました。

「メチャくんが目をさました！」

ハリーも風邪によく効く薬草の煎じ茶を手にしています。、

チコちゃんが額のタオルをかえってくれます。

「メチャくん、ぼくのとっておきのはちみつ、はい。」

コロちゃんが両手でスプーンを持ってメチャくんの口に

ひとさじいれてくれました。

そして、あたたかい毛布にくるまれたメチャくんは、

みんなの静かな話し声としゅんしゅんというお湯の音が重って、

やさしい音楽を聴いているような気持ちになりました。

「ぼく、さっきまであんなにふるえてたのに、なんだかおなかも胸の奥の方もポカポカだ...」と、思いながらまた眠りの国の扉を開くのでした。



第10話「遠く離れていても」

旅鳥が今年の旅に出ることになりました。

湖畔の村の住人たちは遠くに暮らす大切な人にお手紙や小さな贈り物や歌をことづけます。

今年の旅鳥は、旅が終わって帰ってくるところがあることに嬉しさを感じていました。

そしてみんなも旅鳥が帰ってくることがわかっていることを嬉しく思いました。

「ぼくは、もしもしの森から3つむこうの山に住む
ふたごのお兄ちゃんに渡してもらうんだ。メチャくんは？」

コロちゃんが小さな絵はがきを、ぎゅっとぎって言いました。

「ぼくは...ぼくが子どもの頃いっしょに過ごした大切なひとに。」

旅鳥のところにたくさん住人が集まりました。

そして旅鳥のリュックはちいさな贈り物でいっぱいになりました。

「ここにいるみんな、ちいさなさみしさを持ち歩いているんだね。」

みんなの胸のきしきしという音が聞こえてきそうでした。

でもそれはさみしさに何か別の優しいものも混ざった音のようです。

「会えないときはせつなくなるような、そんな人がいて幸せだと思いたいんだ。

遠くにはなれていても大切に想う気持ちは変わらない、ずっと、ずっとね。」

みんなで旅鳥を見送ったあた、

メチャくんはスプーンひとさじぶんだけ泣きました。

そしてノースポールの小さなつぼみを見て、

またにっこりほほえみました。



第11話「春のように」

ほんの少し寒さがやわらいできた朝、メチャくんとコロちゃんはゆっくりお散歩していました。

「ほら、コロちゃん、こんなところに春がいるよ。」

メチャくんがネコヤナギのふわっとした小さな小さな銀色の芽をみつけて言いました。

「ほんとだ！あっ！ここにも春がいるよ！」

コロちゃんがさけびました。

まだ表面が固くつめたい土の下からもっと小さな芽がひょっこり顔を出しています。

「こんなに寒くてつめたかった冬の中、春は春になるためにちつとも休まずにちゃくちゃくと準備していたんだね。

楽しいときも苦しいときも春みたいに、そこに立ちどまらないで進んでゆきたいね。」

「うん、それには綿毛が飛び立つような勇気が必要だね。」

「そうだね。」

そう話しながら、ふたりはうちに帰り着くまでに、

数えきれないほどの小さな春のはじまりをみつけたのでした。



第12話「しあわせのかたち」

おやつの時間です。

メチャくんは大好きなドーナツをひとつお皿にのせて楽しくお茶のしたくをはじめました。

今日は桃のかおりのするお茶に決めました。

メチャくんはドーナツを持ち上げてじっと見つめます。

そしてこのドーナツのリング型は、しあわせのかたちだと感じ、

満足してほおばろうとしたとき、コロちゃんとだんごむしのだんごがやってきました。

メチャくんは桃のお茶をいれてあげ、ドーナツをわけてあげました。

そして、みんなでドーナツを食べようとしたとき、

今度は小鳥のフリップとフラップがやってきました。

メチャくんは桃のお茶をいれてあげて、

またドーナツをわけてあげました。

ドーナツもずいぶん小さくなりました。

でもみんなで囲んだテーブルで、

メチャくんは小さくなつた

ドーナツを見つめ、

「さっきよりもっと

“しあわせのかたち”になった」と、

うんと満足してひとくちサイズになった

ドーナツを口にいれました。



第13話「好きの理由」

メチャくんは、ちょっとりゆがんだ、木のお人形を持っていました。

メチャくんはこのお人形のことがとても好きでした。

「メチャくん、このお人形のどこがそんなに好きなの？」

コロちゃんがたずねます。

「どこが好き？うーん、好きは、ただ好き。なだけだよ。」

「ゆがんでるからとか？可愛いからとか？そういうなんか理由はないの？」

「好きに理由はないよ。好きの理由がないからずっと好きなんだと思うよ。」

このお人形が、このお人形である限り、ぼくはずっと好きだと思うよ。」

「ふーん...」

コロちゃんは、メチャくんのことばに
なぜだかとっても安心して、あたたかいミルクに
はちみつをたっぷりいれて、
嬉しそうにスプーンで
くるくるかきまわしました。

